樟蔭学園報

くすのき

Kusunoki

2024.8
Vol.187

題字：大学　宮崎彰夫名誉教授（日展評議員／雅号・葵光）

巻頭特集
伝統とモダンが調和する 昭和の名建築 樟徳館

こもれびの窓　P.3　グローバルな世界で活かされている樟蔭時代の学び
上野 法子さん

特　集　P.5　2025年4月 学芸学部に
リベラルアーツ学科を新設。

SHOIN LABO（大学）　P.7　環境中の微生物を知ることは、最終的に、
『健康』につながっていくと考えています。
一條 知昭先生

SHOIN LABO（中学・高校）　P.9　私の基礎を作ってくれたのが『樟蔭』、
成長した姿を見せ続けるのが、一番の恩返しだと思っています。
青田 優梨香先生

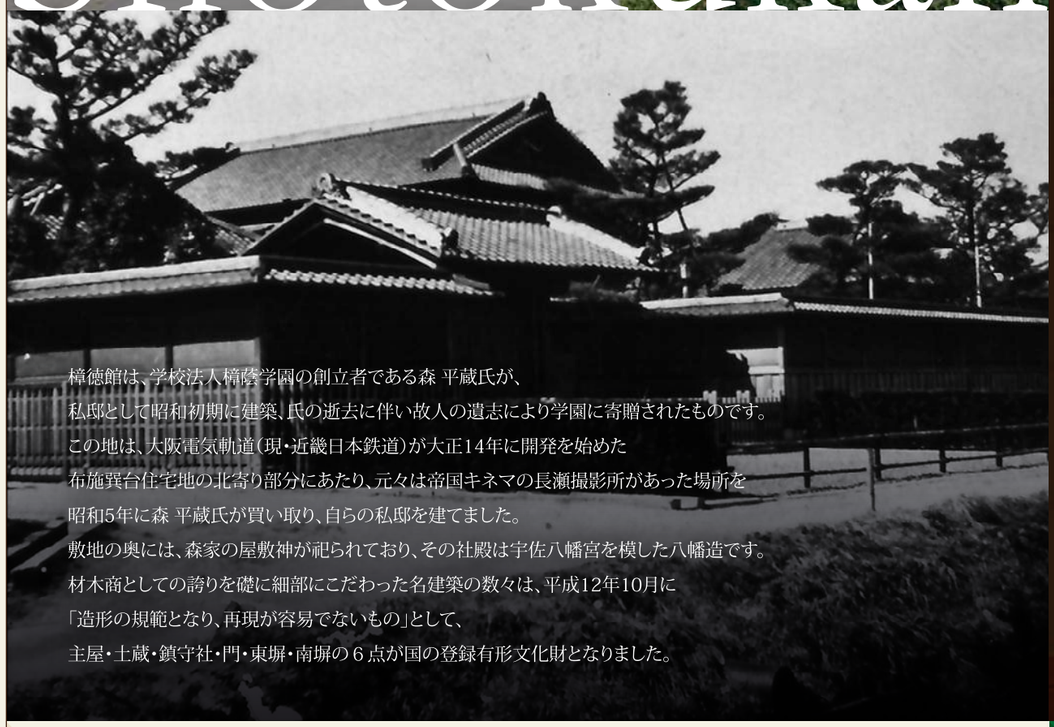
はばたけ、知性。

樟蔭学園 樟徳館

伝統とモダンが調和する昭和の名建築

樟徳館

Shotokukan



樟徳館は、学校法人樟蔭学園の創立者である森 平蔵氏が、
私邸として昭和初期に建築、氏の逝去に伴い故人の遺志により学園に寄贈されたものです。
この地は、大阪電気軌道（現・近畿日本鉄道）が大正14年に開発を始めた
布施巽台住宅地の北寄り部分にあたり、元々は帝国キネマの長瀬撮影所があった場所を
昭和5年に森 平蔵氏が買い取り、自らの私邸を建てました。
敷地の奥には、森家の屋敷神が祀られており、その社殿は宇佐八幡宮を模した八幡造です。
材木商としての誇りを礎に細部にこだわった名建築の数々は、平成12年10月に
「造形の規範となり、再現が容易でないもの」として、
主屋・土蔵・鎮守社・門・東塀・南塀の６点が国の登録有形文化財となりました。

おおさか昭和モダン“粋”の結晶、樟徳館

近鉄長瀬駅から長瀬川沿いに北へ5分ほど歩くと、左手に立派な塀と門が見えてきます。昭和14年（1939）に完成した樟徳館です。

樟徳館は、入母屋造の正面玄関を中央に左に応接間棟、右に2階建ての居室棟を配した和洋折衷の木造邸宅建築です。材木商でもあった森平蔵氏によって建築、各地の銘木が集められました。応接間入り口扉は欅の、天井は楠の、それぞれ一枚板です。柱は木曽檜で、色目や風合いを同じくするため巨大な1本の木からすべての柱が切り出されています。居室棟の洋風居間は関西で最高級とされる松普請。居室棟奥の仏間棟の天井は吉野杉で、仏間は柾目、次の間は中杢で仕上げられています。

NHK朝の連続テレビ小説「カーネーション」「あさが来た」でロケに使われた正面玄関や各室をはじめ樟徳館は再び建築することが困難な近代住宅建築として高く賞されています。

大阪樟蔭女子大学　副学長　白川 哲郎

DATA

建築構造
木造瓦葺2階建

建物面積
1,301.84㎡

帝キネ撮影所（出典：布施町誌）

CHAPTER.01
一世を風靡した帝国キネマの長瀬撮影所跡地に建築

大正末期から昭和初期にかけ、日活や松竹と並ぶ大映画会社だった帝国キネマは、昭和3（1928）年、敷地面積1万坪（約3万3千平方メートル）を誇る長瀬撮影所を構えました。その規模の大きさから「東洋のハリウッド」と称され、『キネマ旬報』優秀映画第一位に輝く映画をはじめ、様々な映画を生み出しました。そのわずか2年後火災により焼失、映画制作の中心は京都・太秦の撮影所に移りました。

CHAPTER.02
銘木蒐集から7年の歳月を費やして建てられた名建築

森 平蔵氏は、自ら材木商を営んでいたことから資材には並々ならぬこだわりがあり、母屋の用材として使用される松材を、三陸、松島、山陰、日向から天草、更には名古屋港内の沈木を原木のまま集荷し敷地に運搬、隣地には製材所を設け、原木の製材が行なわれました。原木を製材するためにわざわざ40インチの台車を据え付け、森 平蔵氏自ら墨がけ、木取りするほどのこだわりでした。

CHAPTER.03
東西一流の職人の技が集結、モダンでおしゃれな和洋折衷デザイン

母屋棟は関西の棟梁、離れ座敷棟は関東の棟梁と互いに技を競わせたと伝わる建物は、入母屋造妻入の純和風な外観に対し、アールデコ調のシャンデリア、寄木造りのフローリングなど、内部には和洋折衷の見事な意匠が多くみられます。

今秋、樟徳館一般公開を開催

**コロナ禍を乗り越え、8年ぶりに樟徳館の一般公開を開催します。
この機会にぜひご来場ください。**

開催日：11月9日（土）・10日（日）｜ 詳細は決定次第、樟蔭学園公式サイトにてお知らせいたします。

- アクセス：小阪キャンパス正門から南へ徒歩約15分、または近鉄大阪線「長瀬」駅から北へ徒歩約5分
- お問い合わせ：学園広報課　TEL：06-6723-8152（直通）

FEATURE

グローバルな世界で活かされている樟蔭時代の学び

Graduate Interviews

合同会社ユー・エス・ジェイ（USJ LLC）
パークオペレーション本部
エグゼクティブアシスタント・通訳

上野 法子さん

1988年3月樟蔭中学校卒業、1991年3月樟蔭高等学校卒業、
1993年3月樟蔭女子短期大学 英米語科卒業。
様々なキャリアを積み、現在は合同会社ユー・エス・ジェイにて
通訳、秘書、エグゼクティブアシスタントを担う。
通訳、翻訳にはじまり、スケジュール管理など、総合的なサポートを行う。

01 先生に支えられた樟蔭での日々

学生時代は、みんな仲が良く、先生との距離がすごく近かったように思います。休み時間になると、いつもみんなで職員室に通っていました。さすがにテスト期間中は閉め出されてしまいますが、それでもめげずにドアの向こうから「先生、こっち向いて！」と一生懸命アピールしていました。振り返ると懐かしい思い出です。先生方からすると迷惑な話ですが、そんな私たちを無下に扱わずに、大きく包んでくれていたように思います。

また中高一緒の学校ならではのエピソードですが、中学生の時に提出せずに終わった家庭科の課題を、高校生になったころ、廊下で会った私に「まだ課題受け付けているよ」と声をかけてくれました。当時はすごくびっくりしましたが、ずっと見守ってくれている証なんだと思いました。もちろん、課題は後で提出しました。先生方との思い出は、今でも鮮明に覚えていることがたくさんあり、忘れられません。勉強はもちろん、それ以外でも可愛がってくださりました。

また今ダイバーシティという言葉が注目されていますが、友達と話していたんですけど、当時から樟蔭生はダイバーシティを実践していたんです。ご年配の先生にはみんなが意識して気遣い、誰かれとなく自ら進んで手伝っていました。お互いに信頼関係が築けているから、とても濃い時間を過ごせたんだと思います。先生も何十年も会っていなくても、顔と名前をちゃんと覚えてくれているのがすごいと思いますしね。

卒業生の方々のご活躍の様子をお知らせください。
学園広報課：TEL.06-6723-8152

ご活躍されている卒業生の情報をお寄せいただき、みなさまの力をお借りして、「こもれびの窓」で卒業生の姿をお伝えしていきたいと思います。身近でご活躍の卒業生の様子を学園広報課までお知らせくださいますよう、お願いいたします。

02 最後まで諦めない力が芽生えた日

樟蔭時代には、私の座右の銘とも言うべき言葉にも出会うことができました。家庭科の授業で、なかなかうまく裁縫できずに何度も投げ出したくなった時、先生が『たとえ途中で失敗したと思っていても、最後できれいに仕上がればそれは成功したことになりますよ』と声をかけてくださったのです。それ以来どんなときでも、最後まであきらめずに努力すれば成果が得られるということを思うようになりました。現在の仕事で困難な壁にぶつかった時や悩んで落ち込んでしまった時など、この言葉に励まされ途中で失敗しても、最後に成功をすればいいと考えています。

成功するのか失敗するのか、どちらに転ぶかは途中段階ではわからない、最後までやるからこそ、わかる。いや、最後までやるからこそ、うまくいく。そんなポジティブな考え方になれたのは、この言葉のおかげです。

03 心に刻まれる『青春の躍動』

高校時代の思い出といえば『青春の躍動』です。樟蔭生なら誰でも知っていると思いますが、樟蔭を代表する体育祭の伝統行事です。どんな内容にするか、衣装はどうするか、音楽は何を使うかなど、全て生徒達だけで話し合って決めて作り上げていきます。まさに高校生活の集大成ともいえる一大イベントでした。生徒それぞれが全力で取り組むので途中で意見が対立することもあるのですが、みんなをまとめる人、場を和ます人などそれぞれの役割が自然と生まれ、うまくコミュニケーションを図れるようになっていったことを覚えています。

みんなで一つの目標に向かって作り上げることの大切さを実感した『青春の躍動』は、樟蔭の生徒だからこそできる体験でした。またこの時に養ったコミュニケーション能力は、現在のチームで取り組む仕事にも役立っています。

04 樟蔭の校風が私の基礎を築く

短大を卒業してからは、元々好きだった英語を活かしたいと思い、貿易会社で働き始めました。その後、オーストラリアに留学したり、シンガポールで働いたりと様々なことにチャレンジしました。現在は地元大阪で合同会社ユー・エス・ジェイに勤務し、秘書、通訳、エグゼクティブアシスタントの役割を担っています。

これまでどんなことでもトライできたのは好奇心旺盛な性格だったこともありますが、いつも自主性を重んじてくれた樟蔭で、のびのびと行動できたからかもしれません。今の私の基礎は樟蔭生として過ごした日々があるからだと言っても過言ではないと思います。

樟蔭の絆、再会で深まる

この前のホームカミングデー（2023年11月開催）では、今でも会う仲良しグループと参加しましたが、当時お世話になった谷口先生、相馬先生、山口先生にお会いすることができました。中学生の時以来長く会えていなかった友達もいて充実した時間を過ごしました。久しぶりに再会できて本当に嬉しかったです。

これをきっかけに、またみんなで会う約束をしたりと、再び集まる機会ができるようになったことはとてもよかったです。このような機会をもっと作ってもらえれば、参加したいと思います。

特集 feature

2025年4月 学芸学部に
リベラルアーツ学科を新設。

※認可申請中

原点回帰は、革命だと思う。

リベラルアーツとは、古代ギリシャ・ローマ時代に起源を発し、「自由7科」(文法、論理学、修辞学、算術、幾何学、天文学、音楽)に由来します。その時代に自由で自立した存在として生きるための技法(学芸)が原点です。

現代は、先行き不透明な時代であり、特定の領域に特化した教育だけで様相をとらえることは困難で、また社会生活に必要とされる知識は膨大かつ日々更新されており、すべて学び尽くすことは、ほぼ不可能です。そのため、重要なことは、修得した知識を「何のために」「どのように使うか」であり、知識をいかに使うかという“知恵”が求められています。本学科では知識の使い手としての“知恵”を「リベラルアーツ」と位置付け、「気づく力」「観る力」「磨く力」「繋ぐ力」から涵養することをめざします。

Why

いま、なぜ、リベラルアーツなのか
偏差値教育からの脱却

答えのない課題に満ちている現代社会において、答えのないものに取り組み、自分で試行錯誤し、自分なりの答えを見つめる力こそが求められています。

困難にぶつかったとき、そこであきらめるのではなく、いろいろなことを考えることができるということで、リベラルアーツの力は発揮されます。

課題発見・解決力、未来社会の構想・設計力を身につけるリベラルアーツ教育こそが、今、絶対に必要なのです。

Origin

大阪樟蔭女子大学は、原点に回帰し、リベラルアーツを学びの中心に据えます

大阪樟蔭女子大学の設置者の樟蔭学園は、1917年の設立以来、「高い知性と豊かな情操を兼ね備えた社会に貢献できる女性の育成」を建学の精神として、100余年にわたり有意な人材を社会に輩出してきました。設立時より、外国人による英語の授業を展開し、ガスや電気を利用した実習室や実験室を完備していたことなど、当時考えられていた理想とする教養を身につけた女性の育成をめざしていました。

先行き不透明で不確かな現代において、今、学園創設の原点に回帰し、時代の要請に応える学びを展開する必要性を認識し、あらためてリベラルアーツを学びの中心に据えるとともに現代的な問題解決に寄与する学生の育成をめざします。

知識から“知恵”へ

PBLを通じて知識を“知恵”へと発展

新学科概要

名称	学芸学部 リベラルアーツ学科
設立の目的	多様化、複雑化した現代社会で活躍するために、修得した知識や技術をいかに使うか、そのような“知恵”を持った人材を養成することを目的として、学芸学部リベラルアーツ学科を設置する。
育成する人材像	基礎的教養を基盤として、人間を理解することと地域を理解することを通じて、現代の社会が抱えている諸課題に気づき、その課題について複眼的かつ俯瞰的に捉え、また、実証的・科学的に探究することで課題の背景・要因を多角的に捉え、社会と文化の多様性を尊重し、人間理解に立脚した社会貢献を果たす意欲を持って、未来に繋がる課題の解決策を提示できる人

Message

学科新設にあたって

複雑性が増大した現代社会では，先行きが不透明で，将来的な予測が非常に困難になってきており，温暖化など地球規模の課題だけでなく，近年急速に発展してきた生成AIによって，今後の社会がどのような影響を受けるのかなど，多くの課題があります。

このような状況に対応できる人材を養成するため，学芸学部に新たな学科を立ち上げることといたしました。リベラルアーツ学科では，基礎的教養を基盤に幅広い視点を持ち，課題に気づき，発見した課題の背景・要因を多面的に捉え，社会と文化の多様性を尊重し，社会貢献を果たす意欲を持って，未来に繋がる課題の解決策を提示できる人材の養成をめざし，教育を展開していきます。

SHOIN LABO

大阪樟蔭女子大学

環境中の微生物を知ることは、最終的に、『健康』につながっていくと考えています。

一條 知昭 先生
大阪樟蔭女子大学
健康栄養学科 教授

Thought

宇宙と深く関わりがある研究をされているとお聞きして、早速お話をお聞きしました。わかりやすく真摯な対応に感動、「"人・環境・微生物"3つの要素が揃えば僕の中ではどこであっても変わりません。」とのお言葉が非常に印象的でした。

Chapter 01 樟蔭に来て6年目になります

大学には2019年4月に着任、今年で6年目になります。研究分野は微生物学ですので、健康栄養学科の微生物学と食品衛生学の授業、あとは関連する実験科目や卒業演習を中心に教えています。今、健康栄養学科2・3年生を教えていますが、非常に真面目だと思いますよ。

この分野は、主力として活躍するのに5年・10年かかると思っています。だから、基本をしっかり教えることはもちろん、将来、現場で活躍できるように、座学だけではなくて技術・技能についても、進歩していく、将来を見越したようなことも取り入れて授業や実験をしています。

実際教えることができているかどうかはわかりませんが、将来を見ながら指導しています。

Chapter 02 進化していく食品衛生の世界

僕の研究分野である微生物学、少なくとも僕が教えている食品衛生学の分野は、今後進歩することは十分考えられると思います。というのは、元々僕は薬学部出身で10数年「薬」の分野、特に衛生管理分野において分析手法や考え方などを含めて進化していく様子を目の当たりにみてきました。

そして「薬」と「食」のつながりは非常に密接であることから、恐らく次は「食」の分野、食の衛生に関するところにくるはずと考えています。だからこそ彼女たちには、進化した将来活躍するときに使えるような技術を身につけてほしいです。

Chapter 03 研究の舞台を宇宙居住環境へ

僕の専門は微生物学です。基本的に環境微生物学、衛生微生物学といって、僕らをとりまく環境中の微生物にフォーカスを絞って研究しています。僕らはいろんな微生物に曝露されながら生きていて、共存しているんですね。ただ普段生活しているうえでリスクに感じないかもしれないけれども、これから先微生物が僕らにどう影響を与えるのかわからない、見ていかなければいけないと思っています。

これは例えば、医薬品を作る環境が微生物学上正常でなくてはいけないことと同じように、食をつくる環境についても同じ事が言えると思います。そのあたりを検証するために環境中の微生物をしっかり理解しなければいけません。そのことが最終的に『健康』につながる 考えのもと、一環として国際宇宙ステーション (International Space Station; ISS)での微生物研究を進めています。

スペースシャトルにおける研究で、宇宙生活をすると人の免疫は落ちることがわかってきています。このような環境では、ヒトと微生物との関係が地球上と異なり、感染症発生のリスクが高まるかもしれません。月面滞在や火星への超長期有人探査などが計画されていることから、これまで以上に微生物に関する知識を蓄えておかないといけません。

地上約400km上空にある国際宇宙ステーション「きぼう」日本実験棟は、微小重力の閉鎖空間、放射線も飛び交う全く経験したことのない環境です。その生活空間において、環境微生物がどうなるのかをモニタリングします。まずは打ち上げの前に地上でチェックし、その後定期的にサンプリングを繰り返します。今まで10回ぐらいサンプリングしたでしょうか。2016年に一度研究成果についてまとめたのですが、今年は頑張って論文を書かないといけないと思っています。

Chapter 04 これからの季節に向けての食の安全

食中毒などで気をつけることと言えば、授業でも言っていますが、まな板を変えるとか、当たり前のことをしっかりやりましょうってことですよね。難しいけれど、当たり前のことを怠らないことが大切です。

細菌の世界はすごく奥が深いです。身体の中には100兆個もおり、人の細胞の数よりも多いぐらいです。微生物には悪いイメージをもたれる方も多いかと思いますが、私たちに役に立つような働きもしてくれています。

特に、最近注目されている腸内細菌は、例えば、ビタミンなどの栄養素を与えてくれたり、免疫力を高めたりするなど、いろんな視点で僕らの身体の役に立ってくれています。また、外から入ってきた微生物から身を守る働きをしてくれるんです。すごく数が多くて種類も豊富な腸内細菌は、外から微生物が入ってきても、腸の中への定着を妨げてくれるんですよね。ストレスを受けると腸内細菌のバランスに乱れが生じることもあります。腸内環境を健康に保つことは、僕たちの健康を維持する上でも大切です。

Chapter 05 「薬」と「食」は切っても切れない関係

元々は薬を作りたいという理由で薬学部を目指しましたが、僕に向かないと色々考える中で"感染症"にすごく興味をもちました。僕が大学2年生の頃ですね。コロナ禍の時は日常的に"感染症"を感じることがあったと思いますが、当時は日本で学ぶことはできるけど、日常生活で実感することはありませんでした。

そんな時、たまたまアジアの状況を知る機会があって、東南アジアでは結構感染症が起こっていることを知り、気になり始めました。それに携わるような研究をしたいと考えているときに、出会った先生が今の恩師です。授業を受けているうちに「面白い！」と感じたし、非常に影響を受けました。大学4年生で、その先生が主宰する研究室に入り、好きなようにさせてくださいました。宇宙研究プロジェクトも勧めてくれましたし、今も共同研究もさせてもらっています。

樟蔭にきてからは、タスクや仕事内容が変わったものの、僕は「薬」と「食」は切っても切れない関係と考えているので、そんなに変わりません。以前は、研究にフォーカスを絞っていましたが、今では教育もしっかりとやらなきゃいけない、と感じています。最初は戸惑いましたが、「教育もおもしろいな」と思えてきたので、今は楽しいですよ。

卒業生の皆様へのメッセージ

樟蔭は伝統があるので、結構な人数の卒業生がおられますよね。"樟蔭"を要として人と人のつながりを、しっかり持っていただけるとネットワークが活きると思います。充分に活かしてほしいし、これから社会にでる後輩たちの支援もいただけるとありがたいなと思います。

樟蔭中学校・樟蔭高等学校

私の基礎を作ってくれたのが『樟蔭』、成長した姿を見せ続けるのが、一番の恩返しだと思っています。

青田 優梨香 先生
樟蔭中学校・高等学校 教諭
保健体育担当

Thought

2005年3月樟蔭中学校卒業、2008年3月樟蔭高等学校卒業。その後大阪体育大学に進み、母校の教員となった卒業生に、生徒時代のこと、改めて指導する側になった現在についてインタビュー。終始、生徒たちへの想い、樟蔭愛に溢れる素敵なお話ばかりで、充実した時間を過ごすことができました。

Chapter 01 学校が大好きだった樟蔭時代

樟蔭中学に入学したのは、塾の先生からの勧めが大きかったです。小学校でソフトボールもしていたことから、勉強も部活も伸び伸びできる学校ということで勧めてくれました。入ってからの印象も変わらず、とにかく部活で休みなし、家族よりも仲間と一緒の時間が長かったぐらいです。

先生方には感謝してもしきれないぐらいです。特に印象に残っているのは、もうお亡くなりになってしまった、辻井 啓子先生です。中学の一番多感な時期に、ダメなことはダメと教えてくださり、熱心に寄り添ってくださいました。今振り返るとご迷惑もたくさんおかけしたと思います。勤め始めてからは、同じ中学教師として一緒にお仕事をさせてもらうことがあり、とてもお世話になりました。

Chapter 02 母校に教員として戻るということ

実は、樟蔭中学・高等学校を卒業する時は、教員になろうとは思わず、もう少し専門的に極めたいと大阪体育大学に進学しました。ですが大学で専門を学んでいくうちに、選択肢の一つとして教員の道を考えるようになり、教職科目を学んでいくうち、おもしろいなと思い、魅力を感じるようになりました。

生徒だった時代も、体育に関しては周りの友達に教えることが多かったり、うまくいって喜んでくれると嬉しかった経験を多くさせてもらったことも大きいです。母校で教員になることについては、親がすごく喜んでくれました。最終進路を後押ししてくださった高校3年生の時の担任、岩村 研志先生（体育）と今同じ体育科でお仕事ができるというのは、感慨深いものがあります。

あと教員として着任した時、教育実習の時に在校していた生徒もいたんですが、着任の挨拶の時には歓声を上げて喜んでくれてうれしかったことを覚えています。非常勤で4年、常勤で9年目ですが、常勤に代わるときも『おめでとう！』と生徒達が言いに来てくれた事が、印象に残る出来事ですね。

Chapter 03 クラブ顧問としての熱い想いも

クラブ活動はソフトボール部の顧問を担当して9年目になります。昔と違って今は生徒数が減っているので、他校と組ませていただいて公式戦に出ています。ただ生徒には常に「環境はどうであれ、自分たちがすべきことは変わらないよね。」と伝えています。その想いはしっかりと伝わっているらしく、毎年春に生徒にスローガンを考えてもらうのですが、今年は「前後裁断※」という言葉を生徒が選んでくれました。

※仏教用語で「前（過去）と今、今と後（未来）の際を切り離して今を生きよ」という意味。

共通の柱（言葉）があれば、ブレそうな時には支えになるので、社会にでる前に取組むことも重要かなと思っています。

クラブ活動では中高の6年間を通して生徒に寄り添うことができるので、人として成長できるような機会を多く作ることを意識しています。

Chapter 04 教員になって気をつけていること

私が受け持っている中学の時期は、成長の過程としてもがき苦しむ3年間だし、多感な時期でもあります。だからこそ指導の際、気をつけていることは、『いいことはいい、ダメなことはダメ』と、きちんと教えることです。もちろん厳しいことを言わないといけない場面も多いですが、生徒に対してはどんな時にも愛情をもって接することを心がけています。

着任当時は、中学3年生を受け持ったのですが、私も要領を得ず、非常に厳しかったです。理想と現実のギャップに苦しみましたし、後悔していることもあります。ただ、その時もちゃんと信念をもって、愛情をもってやるべきことをやる、そこはブレないでいようと思っていました。

とはいえ着任して9年間、保護者と生徒に支えていただいて今の私があります。保護者の皆さまも一緒になって、“子どもをみていきましょう”というスタンスでいてくださっています。

Chapter 05 今も昔も生徒の本質は変わらない

着任当初と比べてですが、生徒の本質はそれほど変わらないものの、社会の環境は大きく変わったため、SNSの使い方、個人情報、時間の使い方など我々や保護者含め大人が教えてあげないといけない部分が絶対に増えていると思います。スマホなどは便利なものですが、使い方を間違えるとただ時間を奪われるツールになってしまいます。自分を律して時間管理する力を身につけるなど、今まで以上に正しく使う方法を教える必要があります。

今の学校は成長のチャンスを多く設けていて、どの先生も生徒一人ひとりに労力を惜しまず時間をかけてくださるので、やる気次第で手厚いサポートが受けられます。クラス行事だけでなく、希望して参加するプロジェクトも色々あるのでいろんな経験ができます。過去には生徒の希望でサークルが立ち上がったり、自治会の呼びかけがあったりしました。自分が生徒の時には、クラブ活動しか見えなかったのでもったいないなあと。生徒には有効に活用してもらいたいと思います。

卒業生の皆様へのメッセージ

私の軸を作ってくれたのが“樟蔭”そこで出会った友達とは今でも交流があってすごく応援してくれています。今も昔も変わらず、何にも代えがたいものですし、大事にしていけたらと思います。友達はもちろんのこと、名前を上げたらきりがないですが、学生時代からお世話になった先生方には感謝しかありません。それを言葉に伝えるだけでなく、成長した姿を見せ続けることが一番の恩返しなのかなと思っています。